

パウロのハバクク書二章四節解釈

——キリスト論的解釈の可能性をめぐって——

伊 藤 明 生

はじめに

パウロはローマ人への手紙一章一七節とガラテヤ人への手紙第三章一一節とでハバクク書二章四節から引用している。どちらの箇所でも、いわゆる「信仰義認」の教理をパウロが論じる関連で、ハバクク書二章四節が引用されている。新改訳聖書の脚注にも記されているように、注解者たちは従来、ハバクク書二章四節からの引用の解釈を巡っては、主に *ek pisteōs* (「信仰によつて」) が *o dikaios* (「義人」) を修飾するか、または *hōtetu* (「生きる」) を修飾するかを論じてきた。本稿ではそのような問題よりも、より大きな問題となりうる別の問題、つまりパウロはハバクク書二章四節の「義人」を義とされたキリスト者のことではなく、キリスト御自身に結び付けて解釈している可能性についてハバクク書の本文、ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙の文脈などから論じていく。^① 先ず、最初にハバクク書二章四節のヘブル語本文とギリシャ語訳の

本文を比較検討し、その上で、ローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙の文脈に取り組んでいくことにする。

(一) ハバクク書二章四節のメシヤ的解釈をめぐって

ハバククは一章でイスラエルの神主(ヤハウエ)と一連の対話をしている。先ずハバククがイスラエルの中に認められる不法・不正について主に訴えている(二―四節)。イスラエルの神主はそれに対して、カルデヤ人を起こして神の民を罰するとお答えになっている(五―一節)。イスラエルの預言者であるハバククには、異邦人であるカルデヤ人を神が用いて神の民を裁くのは、余りにも耐え難く感じて、主に對して大胆に「訴え」ている。それに対する主のお答がハバクク書二章二節以降である。様々な形で第二神殿期に、異邦人の支配者の圧制・弾圧の下で苦しんでいたユダヤ人たちがハバクク書に自分たちの希望を読み込んだのも頷ける。救い、終末の到来の遅延に関連してしばしばハバクク書二章三、四節は言及されてきた。^②

ハバクク書二章三―四節のヘブル語本文とギリシャ語本文とを比較してみると、いくつかの点に気が付かされる。先ず、ヘブル語本文は以下の通りである。

ハバクク書二章三節：

פִּי הוֹדוּת לַיהוָה וְלִפְנֵי יְהוָה
אֶמְתַּקְּמוּן תְּפִלָּתִי וְאֶתְחַנֵּן
לַיהוָה

ハバクク書二章四節：

וְהָיָה עֲקִירָה אֶתְחַנֵּן
וְהָיָה עֲקִירָה אֶתְחַנֵּן

וְהָיָה עֲקִירָה אֶתְחַנֵּן

へブル語本文では、通常の翻訳聖書（例えば、新改訳聖書）同様に、三節（「それを待て。」）で待つ対象は「幻」であり、必ず来るものも（「それは必ず来る」）「幻」以外の何ものでもない。「待っておれ」の目的語（主）は男性単数で、「必ず来る、遅れることはない」と言う二つの動詞（*ἔλθῃ*、*ἔλθῃ*）の主語も三人称男性単数である。名詞「幻」（言）はへブル語で男性名詞であるので、この文脈ではこれらの人称代名詞（明記されていないものも含めて）は「幻」を指すものと思われる。ところが、ギリシャ語訳の本文では少々事情が異なっている。^③

ハバクク書二章三節：διότι ἔτι ὄρασις εἰς καιρὸν

καὶ ἀνατελεῖ εἰς πέρας

καὶ οὐκ εἰς κενόν

ἐὰν ὑστερήσῃ ὑπόμεινον αὐτῶν

ὅτι ἐρχόμενος ἦξει καὶ οὐ μὴ χροῦσιν

ハバクク書二章四節：ἐὰν ὑποστειλήται οὐκ εὐδοκεῖ

ἡ ψυχὴ μου ἐν αὐτῶ

ὁ δὲ δικαῖος ἐκ πλοτεῶς μου ἤσεται

一通り訳して置くと、以下のようになる。「それ故、幻はまだ定めの際のためである。そして、それは終わりまでもたらず。空しくはならない。もし、（彼／それが？）来るのが遅くなるなら、彼を待て。なぜなら、来るべき方は来る、遅くなることは決してない。もし、彼が恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。しかし、義（正しい）人はわたしの真実／信仰から生きる。」

詳細はともかく、ハバクク書のギリシャ語本文では、*αὐτῶν* と *ἐρχόμενος* とは「幻」を対象指示すること

ができない。ギリシヤ語の名詞「幻」(ὄρασις) は女性名詞であるが、先の二つの単語は男性形である。ヘブル語本文をギリシヤ語に翻訳した者は、ギリシヤ語の意味を深く考えないで、そのまま器械的にヘブル語からギリシヤ語に訳しただけかもしれない。しかし、ギリシヤ語訳の本文では、「彼を待て。」「彼は必ず来る。遅れることは決してない。」と読むことができるようになった。「彼」であって、「それ(幻)」ではない。この文脈には男性名詞は見当たらない。勿論、「彼」がだれかは問題かもしれない。さらに、ヘブル語本文にはなかった冠詞が二章四節の「義(正しい)人(δικαίος)」に付加されている。ギリシヤ語の冠詞には様々な用法があることは認め、注意を要するが、メシヤ／キリスト的解釈を招きやすくなった。つまり、「彼を待て。」「彼は必ず来る。遅れることはない。」と言われる「彼」とは、「あの義(正しい)人」と言うことになる。旧約聖書がギリシヤ語に訳された第二神殿期のユダヤ民族の置かれた状況を考慮すれば、ハバククに対する主の応答に「メシヤ」的要素が込められてきて当然な気もする。ただ単に「義人」は主に忠実に生きる、との主の答えには満足し切れないで、当時のメシヤ待望と結び付けたとしても不思議はない。特に、わずかの本文の操作でメシヤ的視点が組み込まれるとしたら、尚のこと、そうであろう⁶。

このようなハバクク書二章四節のメシヤ的解釈は、ヘブル人への手紙での引用では、より明確になっている。

ヘブル人への手紙一〇章三五節：

μη ἀποβάλητε οὖν τὴν παρηγοίαν ὑμῶν,

ἵτις ἐστὶ μεγάλην μισθοδοσίαν.

ヘブル人への手紙一〇章三六節：

ὑπομονῆς γὰρ ἔχετε Χρεῖαν

ἵνα τὸ θέλημα τοῦ θεοῦ ποιήσαιτες

κομίσηθε τὴν ἐπαγγελίαν.

へブル人への手紙一〇章二七節：

ἐτι γὰρ μικρὸν ὄσον ὄσον,

ὁ ἐρχόμενος ἴδει καὶ οὐ χροῖσται.

へブル人への手紙一〇章二八節：

ὁ δὲ δίκαιός μου ἐκ πίστεως ἔησεται,

καὶ ἐὰν ὑποστειλήται,

οὐκ εἰδοκεῖ ἡ ψυχὴ μου ἐν αὐτῷ.

へブル人への手紙一〇章二九節：

ἡμεῖς δὲ οὐκ ἐσμεν ὑποστοῆς εἰς ἀπόλειαν

ἀλλὰ πίστεως εἰς περιποίησιν ψυχῆς.

へブル人への手紙の著者のハバクク書からの引用の解釈は、引用されている本文から、かなりの程度わかる。本文はギリシャ語訳の本文に近いが、鍵となる相違がいくつかある。ギリシャ語訳本文が既にメシヤ的であるならば、へブル人への手紙では起こりうるあいまいさが取り除かれている。先ず分詞 *erchomēnos* の前に冠詞 *ὁ* が付加されている。^④「来るべき方 (*ὁ ἐρχόμενος*)」は、マタイ福音書一章三節／ルカ福音書七章一九節同様に、称号として理解することができる。ところが、決定的な「修正」は三八節に見られる。ハバクク書二章四節の前半と後半（ギリシャ語訳本文）との順序が逆にして再解釈がなされている。

理解していた可能性は十分に考えられる。勿論、そのためにはパウロが書いたローマ人への手紙とガラテヤ人への手紙の該当箇所に取り組まなければならない。その前に、*o dikaios* がメシヤ称号として用いられていたと思われる根拠を垣間見ることにする。

(二) メシヤ称号「義なる(正しい)方」

「(あの)義人」と言うメシヤ称号は当時の文献にも見いだせるのであろうか。新約聖書前後の新約聖書外ユダヤ教文献で「義人」と言う表現がメシヤ的に用いられているのは、第一(エチオピア語)エノク書三八章である。第一エノク書三八章では「エノク」が終末の裁きの場面を描写している。「義人の教団が出現し、罪人らがその罪ゆえにさばかれ、地のおもてから追いたてられるとき、義なるお方が、選ばれた義人たち、(すなわち、)その行ないが靈魂の主(のみむね)にぴったり合致している者たちの前に姿を現わされ、乾いた大地の上に住まう義人、選民たちに光が現われるとき、：義人たちの秘密があらわにされるとき、罪人たちはさばかれ、不敬虔な者たちは義人と選民たちの前から追い払われるであろう。：」この箇所だけを見ると、神の最後の審判に関する記述で、「義なるおかた」とは神御自身のこととも理解できる。ところが、幻の描写が展開されていくと、「義なるおかた」が神とは区別される存在であることがわかってくる。「義と信仰の選ばれた者」(二三九章六節)、神の裁きと救いの代行者(特に六一章)、「人の子であり、彼は義をもっており、義が彼に宿っている。」(四六章三節、四八章二節、六二章五、七、九節参照のこと)と別の箇所では呼ばれるメシヤ的存在を指すものと思われる。「選ばれた者」と言う表現が第一エノクでは好まれているようではあるが、「義人にして選ばれたおかた」(五三章六節)と組み合わせ用いられてもいる。この義なるおかた

は人間の存在（「人の子」！）であるが、終末の裁きの際にのみ現われ、それまでは隠されている（六二章七節）。

このような「義なるおかた」の描写は「たとえの書」（三七―七一章）に限られている。この部分の第一エノク書はクムランで発見された断片的写本の中には見出し出されていないので、ミリクは「たとえの書」全体が後代のキリスト教徒による付加と推定し、紀元後二七〇年頃の作と推定している。それでも、いまだに大多数の学者の見解によると、「たとえの書」は一世紀のユダヤ教の著作と見られている^⑧。成立年代は確かに重要な要素であるが、ここでの議論が必ずしも年代によって大きく左右されると考える必要はない。もし、大多数の学者の意見の通りに一世紀のユダヤ教の文献であるならば、終末的解放者（メシヤ）を「義なるおかた」と同定するユダヤ教の伝統が存在した証拠になる。しかし、もし「たとえの書」がキリスト教徒の手に帰されるならば、ユダヤ人キリスト教徒がイエスを「義なる（正しい）方」と呼んだとする新約聖書に加え、もう一つの証拠が加えられることになる。

新約聖書中でもっとも明確な形で見られるのは、使徒の働きである。三章一四節、七章五二節、二二章一四節などを挙げることができる。手短に個々の本文を見てみる（聖書からの引用はすべて私訳である）と、先ず三章一三―五節では、ペテロは足なえの男が癒された後に、ソロモンの回廊にいる人々に向かって「アブラハム、イサク、ヤコブの神、すなわち、私たちの先祖の神は、御自身のしもべ（*toû paida autou*) イエスに栄光をお与えになりました。あなたがたは、この方を引き渡し（*take ôkate*)、ピラトが釈放すると決めたのに、その面前でこの方を拒みました。そして、あなたがたは、この潔く正しい方（*toû dyon kai sikalon*) を拒んで、人殺しの男を赦免するように要求し、いのちの君を殺しました。しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせました。」議論の余地はあるが、「しもべ」、「引き渡し」と言う表現にイザヤ書五

三章の「苦難のしもべ」への言及が示唆されているかもしれない。それとは無関係に、「この潔く正しい方」が不当に処刑された（一五、二八節）が、天に受け入れられ、終末的万物の回復時までそこに留まっているメシヤ・イエスである（三章一八、二〇節）ことは明らかである。

次の箇所はステパノが敵意に満ちた議會に語りかけた演説のクライマックスである。「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。あなたがたは、先祖たちと同様に、いつも聖靈に逆らっているのです。あなたがたの先祖が迫害しなかつた預言者はだれかいたでしょうか。そして、彼らは、正しい方が来られることについて (*hepi tōs prophetōn tou dikaiou*) 前もって宣べた人たちを殺したが、今あなたがたは、この方を裏切る者、殺す者となりました。あなたがたは、御使いたちによつて定められた (*eis daitarōs dytēan*) 律法を受けたが、それを守つたことはありません。」（七章五一〜五三節）ここでは、「正しい方」が称号的に用いられている。この方の来られることをイスラエルの預言者たちが預言してきた。七章五五〜五六節で神の右に立っている人の子と同定されている（ダニエル書七章一三〜一四節、詩篇一一〇篇一節、第一ペテロ三章二二節参照のこと）。三章一四節同様に、ここで天的栄光が正しい方に帰されると共に、殉教者としての彼の死の主題が認められる。

二三注目に値することがある。(一)正しい方が来られることへのステパノの言及に、メシヤ預言としてハバクク書二章三〜四節の読み方が反映しているのかもしれない。七章五二節の表現（つまり正しい方が来るといふ預言）に見事に合致するメシヤ預言は、ハバクク書二章三〜四節以外にない。(二)称号としての正しい方と人の子とが至近距離で同じ人物に用いられていることから、先に触れた第一エノクの本文と、この箇所とに共通の背景のあることが示唆されている。(三)ステパノの殉教の文脈で、イエスが正しい方として言及されていることは、十字架の下で百人隊長が口にした言葉（「ほんとうに、この人は正しい方であった。」）を思い

起こさせる。四使徒の働き七章五一―五三節とガラテヤ人への手紙三章との間には、興味深い結び付きを認めることができる。両方の本文に明らかかな伝承は、律法が御使いたちを通して与えられたことへの言及である（使徒の働き七章五三節、ガラテヤ人への手紙三章一九節）。さらに、福音が予め聖書を通して宣べられてきたにも言及がある（使徒の働き七章五二節、ガラテヤ人への手紙三章八節）。そして、キリスト教の宣教の内容に何らかの形で *dikaios* が関連付けられている。

使徒の働きでの称号としての「正しい方」の最後の使用は、パウロがエルサレムの群衆に向かつて語っている中に見られる。ダマスコ途上での出来事の後に、アナニヤがパウロに語った言葉として語られている。「私たちの先祖の神は、あなたにみこころを知らせ、正しい方を (*tois dikaios*) 見させ、その方の口から御声を聞かせようとお定めになったのです。なぜなら、あなたはその方のために、すべての人に対して、あなたの見たこと、聞いたことの証人となるのです。」終末的主题は見当たらないが、正しい方が幻で現れると言う黙示的文脈が認められる。そして、幻の結果、啓示に関する証詞をするようにとの「予見者」の召命となっている。「正しい方」が「ナザレのイエス」(二章八節)であることがパウロに知らされたことのみが私たちに語られている。イエスの「迫害」とはパウロによるキリスト者迫害のことである(二章四―五節)。メシヤと彼の民との密接な関係が示されているが、これは初期キリスト教宣教の救済的論理には重大な意味があった。

使徒の働きでの称号 *dikaios* について二三のことに注目できる。この用語はエルサレムのユダヤ人の聴衆に語りかける話にしか見出しされない。しかも、聴衆には自明であるかのように何の説明もなされていない。ルカの歴史家としての執筆作業を考慮すれば、ペテロ、ステパノ、パウロなどはともかく、少なくとも使徒の働きの著者であるルカは *dikaios* がメシヤ称号であり、初代のユダヤ人キリスト教説教者がユダヤ人の聴

衆に向かつてメシヤについて語る際に用いたと信じていたと言うことを結論付けることができよう。従つて、使徒の働きでの三箇所での用例から、「正しい方」が初期キリスト教での慣習的メシヤ的名称であつた蓋然性は高いと言えよう。

さらに公同書簡にも正しい方への言及がいくつか見いだせる。もつとも重要と思われるのが第一ペテロ三章一八節前半である。「なぜなら、キリストも一度罪のために死なれました（異読では「苦しみました」）。正しい方が悪い人々の代わりに (*Sikalos υπέρ δικών*)。」「ペテロは伝統的な信仰告白と思われるものを引用して（ガラテヤ人への手紙一章四節参照のこと）、キリストの苦しみをキリスト者は模範とし、善を行なつて苦しみを受けるように、と奨励している（三章一七節）。信仰告白では正しい方の苦難の代理的效果が強調されているが、第一ペテロでは模範的性質に焦点が合っている。信仰告白はイザヤ書五三章一〇節後半〜一二節（ギリシヤ語訳、ヘブル語本文との相違に注目）に基づいているものと思われる。「そして、主は、…多くの者のためによく仕える正しい方を義とすること (*Sikaloson sikalon*) を望んでいる。そして、彼自身は彼らの罪を担うようになる。このことのために彼は多くのものを相続し (*κληρονομήσει νόμους*)、強い者たちの分捕り物を分割するようになる。それは、彼の生命が死に引き渡され (*παροδόν*)、不正な者たちの間で数えられ、彼自身多くの者たちの罪を担い、彼らの罪のために引き渡された (*δια τὰς ἀμαρτίας αὐτῶν παροδόν*) からである。」

正しい方の苦しみに贖罪的側面があることには使徒の働きでは触れられていなかったが、正しい方と結び付けられている他の主題は、既に見てきたものに類似している。正しい方は不当に苦しんだが、神に擁護され、栄光を受けて「御使いたち、もろもろの権威と権力を従えて、神の右におられ」る（三章二二節）。ところが、四章一八節の「義人」、さらにはヤコブの手紙五章六節「正しい人」にはメシヤ称号の意味合いは認め

られない。

最後にヨハネの手紙第一に見いだせる dikaios の三つの用例に触れて置く。第一ヨハネ二章一節後半での用法は第一ペテロ三章一八節の用法に類似している。「もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前で仲裁して下さる方 (hapkanton)、正しい方イエス・キリスト (i'pouu xpoutou dikaiou) がおられます。そして、この方こそ、私たちの罪のための贖いなのです。私たちの罪だけではなく、全世界のための。」第一ペテロ同様に、正しい方は正しくない者のために代わりに贖う方として提示されている。ところが、ここでは適用が少々異なっている。正しい方であるイエスは罪を犯す者を安心させる存在である。彼の模範的な苦しみへの明白な言及はない。第一ヨハネでは、称号的意味合いは不明瞭であるが、さらに二章二九節、三章七節にもイエスとの関連で dikaios が用いられている。

第一エノクは例外的用法である可能性はあるが、以上扱った本文の執筆年代はすべてパウロ書簡よりも少し後である。しかし、正しい(義なる)方と言う主題は伝統的なもので、これらの文書以前に流布していたと想定できよう。特に、使徒の働きと第一ペテロの該当箇所について、そのように言うことができる。また、ヘブル人への手紙一〇章三七〜三八節では、イザヤ書二六章二〇節 (i'kpor bou bou「ほんのしばらく」とハバクク書二章三〜四節とが組み合わされていることから、そのような解釈の伝統が既にあったものと考えられる。

(三) ローマ人への手紙一章一七節のハバクク書二章四節

ローマ人への手紙一章一六、一七節には、ローマ人への手紙の主題が提示されている(修辞学で言う「プ

ロポシテイオ」)、とほとんど例外なく注解者たちは指摘している。そのような箇所にはバクク書からの引用が見い出されるということは、パウロのハバクク書二章四節理解がローマ人への手紙理解の鍵ということが言える。そして、その主題は一言で言えば、「福音」であることから、パウロの福音理解の重要な鍵ともなってくる。

関連のある本文は以下の通りである。

ローマ人への手紙一章一六節：

ὁ γὰρ ἐπασχύνομαι τὸ εὐαγγέλιον,

διναίμιν γὰρ θεοῦ ἔσθιν ἐἰς σωτηρίαν παντὶ τῷ πιστεύοντι,

Ἰουδαίῳ τε πρῶτον καὶ Ἑλλήνι.

ローマ人への手紙一章一七節：

δικαιοσύνη γὰρ θεοῦ ἐν αὐτῷ ἀποκαλύπτεται

ἐκ πίστεως εἰς πίστιν,

καθὼς γέγραπται· ὁ δὲ δίκαιος ἐκ πίστεως ζήσεται.

ローマ人への手紙一章一八節：

ἀποκαλύπτεται γὰρ ὄργη θεοῦ

ἀπ' οὐρανοῦ ἐπὶ πάντων ἀσέβειαν

καὶ ἀδικίαν...

ローマ人への手紙三章一一節：

ὡνὴ δὲ χωρὶς νόμου

δικαιοσύνη θεοῦ

νεφανεύεται

μαρτυρουμένη ὑπὸ τοῦ νόμου καὶ τῶν προφητῶν,

ローマ人への手紙三章一二節：

δικαιοσύνη δὲ θεοῦ

διὰ πίστεως Ἰησοῦ Χριστοῦ

eis πάντας τοὺς πιστεύοντας.

まず、一章一七節で「神の義が、そのうちに *fiat* から *fiat* へと啓示されている (*ἀποκαλύπτεται*)。ちようど以下に書かれている通りに」とハバクク書二章四節の引用が導入されている。義の「啓示」と言われる時、黙示／終末的出来事が、ここで言及されると容易に期待される^⑩。神の義の啓示に神の怒りの啓示(一章一八節)が伴い、差し迫った終末の裁きまで言及されている(二章一―一一節)。イスラエルを救うために神が介入するという終末の完成が約束されている詩篇、イザヤ書などの箇所が反映していることを認めることができる。顕著な例として詩篇九七篇二節(ギリシヤ語訳で。邦訳聖書では九八篇二節)を挙げる
ことである。 *ἐγνώρισεν κύριος τὸ σωτήριον αὐτοῦ ἐναντίον τῶν ἐθνῶν ἀπεκάλυξεν τὴν δικαιοσύνην αὐτοῦ* (主は御自身の救いを知らせた。御自身の義を国々の前に啓示した。この他、イザヤ書五一章四―五節、五二章一〇節など参照のこと) ローマ人への手紙一章一六、一七節の鍵となる用語はほとんど、この箇所に見い出される。パウロは、このような旧約聖書の箇所を直接引用したり、言及したりしていないが、用いている表現から、パウロの言う福音とは旧約聖書で約束されている希望の成就として理解されなければならぬことがわかる。神の義は、ユダヤ人を始め異邦人を救う神のみわざのうちに啓示されている、とパウロは主張し、福音が神の義を確証するのであって、妥協するものでないことが論じられている。

それでは、このような文脈でハバクク書からの引用でパウロの議論はどのように進められているのであろうか。通常の理解では神の義の啓示と信仰義認の個々人への適用とが、この引用で結び付けられることとなる^⑩。ところが、パウロのローマ人への手紙の議論の中心が、イスラエルとの契約に対する神の真実の問題であることを考慮すると、ハバクク書からの引用が的確なものであることが明白になる。預言者ハバククはイスラエルの神ヤハウェに先ず、イスラエルの民の中の不正の問題を訴えている。それに対して、神は異邦人であるカルデヤ人を用いて裁くと答えている。そこで、ハバククは異邦人を用いて神の民を罰するというような不正を神はなぜ許されるのか、と不平を述べている。どうして邪悪な者を用いて神は正しい者を抑圧することができるのか、神は御自身の民を見捨てられたのか、と。従って、ハバクク書二章四節は神義論の問題に対する答え、神の義を暗黙に主張していることになる。神の正義の現われはまだ見えないが、信仰共同体は忠実に忍耐強く待つように命じられている。

ただヘブル人への手紙とは異なり、パウロは信仰者たちに忍耐を奨励するためにハバクク書の本文に訴えているのではない。そうではなく、福音が啓示されたことに、この預言が成就したとして扱っている。もはや神の義の啓示は未来の希望ではなく、今の現実となった。神の福音は予め預言者たちを通して聖書に約束されていた（一章二節）が、今や預言された終末の救いが実現した。預言の言葉と今の現実とが合致して、神の義を主張することが確認された。即ち、ハバククの語った希望は遂に福音の啓示を通して現実のものとなったとパウロは主張している。ギリシャ語訳のハバクク書二章三―四節がメシヤ的であることを踏まえれば、このような主張は容易に理解することができる。来るべき方メシヤの到来が約束されている。キリスト教宣教によれば、イエスこそが長らく待ち望まれてきたお方である、というものであった。パウロが黙示的ハバクク書解釈によって、ハバクク書二章四節をイエス・キリストの到来について約束した預言と認めたこ

とは十分に考えられる。^⑩

ところで、*o dikaios* はどうであろうか。パウロが、この語をメシヤ称号的に理解したと思われる根拠はあるだろうか。それとも、ヘブル人への手紙の著者のように、*o dikaios* をイエスと直接には結び付けないでメシヤ的暗示の本文であるハバクク書を読んだことの方がより考えられるであろうか。ローマ人への手紙一章一七節のパウロの表現は余りにも圧縮してあるので、定かにこの問いに答えることは困難である。とはいえ、伝統的な解釈に対抗して、ローマ人への手紙一章一七節の「メシヤ」的解釈を支持すると思われる要素をいくつか列挙しておきたい。

神の義が *ek hōtōn* に啓示されていると言うのは、一体どのような意味であろうか。前置詞 *ex* の基本的意味は「起源（〜から）」であり、それから派生した意味として道具的（〜によって）と時間的（〜の時から）がある。人間（キリスト者）の神に対する信仰の姿勢そのものが、神の終末的な義が新たに啓示される起源あるいは道具・手段となるとは考え難い。それこそ、ユダヤ人たちは常に神を信じてきたのであるから、パウロが敢えて、このように言わなければならないとするのは不可解である。しばしば *ek hōtōn eis hōtōn* という成句^⑪として理解されるので一七節前半の *ek hōtōn* を独立させて理解するのに問題があると読者は考えるかもしれない。しかし、一七節には *ek hōtōn* と言う句が二つ見られるので、ここの並行を見落としてはならないと筆者には思われる。引用文の内部と外部という違いはあっても、同じ節内に並んで全く同じ句がある以上、ハバクク書からの引用内の *ek hōtōn* と *ek hōtōn eis hōtōn* 内の *ek hōtōn* とは密接に関連していると理解するべきであろう。つまり、「というのは、神の義はそれ（福音）のうちによつて *hōtōn* から *hōtōn* へと啓示されている。それは、『正しい人は *hōtōn* から生きる』と書かれている通りである。」節の真ん中の *ek hōtōn eis hōtōn* (*hōtōn* から *hōtōn* へ) を成句的に扱わないで、むしろ二つ

の *ek pisteōs* に注目するならば、二つの同じ句が同じ節で同じ意味を持つ蓋然性は非常に高いと思われる。とすると、正しいガイエスの *motus* から神の義は信じる者たち（人々の信仰）に（*eis motu*）啓示されていると言ふことをパウロは意図しているのではないだろうか。そこで、前者の *motus* は通常訳されるように「信仰」ではなく、むしろ「真実」、「誠実さ」と訳すべきであろう。つまり、「というのは、神の義はそれ（福音）のうちに／によって（御自身の）真実から（人間の）信仰へと啓示されている。それは、「正しい人は自らの真実から生きる。」と書いてある通りである。」

このような解釈は、一章一六節後半の「神の力」(*Dynamis theō*)と一章一七節前半の「神の義」(*Dikaiōtin theō*)との並行から、さらに確認することができ、パウロは勿論、「神の力」を「福音」と同定しているように、「福音」を「神の義」と同定していないので、ここで微妙な意味合いの相違は認めなければならぬ。しかし、それでも「神の義」は「福音」のうちに／によって啓示されている、と言うように、「神の義」と「福音」との間に密接な関係があることは明瞭である。この「神の義」と「神の力」との並行から、ここでの「神の義」には単なる静的な意味合いでの「義」ではなく、動的な意味合いが含まれることが想定できる。そして、このことは一八節前半との並行でさらに確かになってくる。「天から神の怒りが啓示されている。」（一八節）との並行から、やはり終末／黙示的出来事が、ここで対象指示されていることがわかる。また、パウロは既に一章三〜四節で「神の福音 (*euagylion theō*)」を「御子 (*uios autou*)」と直接結び付けて定義付けているので、ローマ人への手紙の主題を提示する重要な箇所です。キリストに言及すること自体は決して不思議ではない。むしろ全くキリストに触れないで主題提示をしているとすると驚きに値する。

以上のような理解は、さらに三章二二節との並行から、支持される。三章二二節では明らかにキリストの信仰（あるいは真実）から信仰者の信仰へと動きが認められる。「神の義はイエス・キリストの信仰／真実

を通してすべて信じる者たちへ (διὰ πίστεως ἰησοῦ Χριστοῦ εἰς πάντας τοὺς πιστεύοντας) は一章一七節の「(キリストの)信仰(／＼)眞実)から(人の)信仰へ (ἐκ πίστεως εἰς πίστιν)」に対応すると理解することができる。しかも、このような動きは、一章一八節にも認められる。「神の怒りは天からすべての不敬虔と不正の上に啓示される。(ἀποκαλύπτεται γὰρ ὀργὴ θεοῦ ἀπὸ οὐρανοῦ ἐπὶ πάντων ἀσεβέτων καὶ ἀδικῶν...)」と。上から下への、神から人への動きが基調となっていることを伺い知ることができぬ。

もし、以上論じてきたローマ人への手紙一章一七節の理解が正しいとすると、パウロの言う「福音」とは、罪人はキリストを信じて救われると言う「信仰義認」に留まらないで、キリスト御自身の救いのわざをも含める、より包括的な福音理解が、この節では簡潔に提示されていることになる。

(四) ガラテヤ人への手紙三章一一節のハバクク書二章四節

関連箇所は以下の通りである。

ガラテヤ人への手紙三章一一節：

ὅτι δὲ ἐν νόμῳ οὐδεὶς δικαιοῦνται παρὰ τῷ θεῷ ὄντων,

ὅτι ὁ δίκαιος ἐκ πίστεως ἔσται.

ガラテヤ人への手紙三章一一節：

ὁ δὲ νόμος οὐκ ἔστιν ἐκ πίστεως,

ἀλλ' ὁ ποιῶν αὐτὰ ἔσται ἐν αὐτοῖς.

通常の理解によれば、「だれも神の御前で律法によつて義とされなことは明らかである。なぜなら、義人

は信仰によって（あるいは信仰による義人は）生きるからである。ところで、律法は信仰によるのではない。しかし、それら（戒め）を行なう者はそれらによって生きる。」となる。つまり、律法と福音、そして信仰と行ないの対照が前面に出ていると理解される。¹⁷⁾

ガラテヤ人への手紙三章の中心的対立は行ないと信仰ではなく、律法とキリストであり、議論はキリスト論的に展開されている、と筆者は既に別の機会に論じた。¹⁸⁾ 見落とされがちではあるが、とりわけ二章二一節後半 (εἰ γὰρ διὰ νόμου δικαιούνη, ἀπὸ Χριστοῦ διαπεθευθήσεται) は三章全体の議論を理解する上で非常に重要であると論じた。「もし義が律法を通してであれば、キリストは無駄に死んだことになる。」いわゆる事実と反する条件文（第二級条件文）¹⁹⁾ であるので、逆に表現すれば、義は律法を通してではなく、キリストを通してである（三章二一節後半参照のこと）。まさに義をもたらすためにキリストは死んだ。律法とキリストとは義ということ（神学用語で言う「義認」のこと）に関して言えば、相入れない手段に他ならない、とパウロは主張している。パウロが二章一六節で導入している *πίστις* (*ἰσθὸς*) *Χριστοῦ* と *ἔργα νόμου* との対照は実は、信仰と行ないと言うよりもキリストと律法との対照の方に重点があったことが、この二章二一節で明らかになってくる。そして、そのことは既に一七節で *διὰ τῆς πίστεως* (*ἰσθὸς*) *Χριστοῦ* の代わりに *ἐν* *Χριστῷ* を用いて *δικαιοσύνη ἐν Χριστῷ* と表現されている。同様の *ἔργα* とは三章二一、五節の *ἀκοή πίστεως* と *ἔργα νόμου* との対照にも認めなければならぬであらう。*ἀκοή πίστεως* の意味に関する議論は複雑になりがちであるが、*πίστις Χριστοῦ* との共通項が *πίστις* であることから、両方の表現の中心は *πίστις* の方にあると考えられがちである。しかし、二章一五節から二一節でガラテヤ人への手紙の主題が提示されていること（修辞学的に表現すれば「プロポシテリオ」）、そして二一節は一五節からの議論をまとめ、三章一節からの本格的な議論（少なくとも五章二一節まで「プロバテリオ」）に備えるものであることを考慮すると、二章二一

節を真剣に受け止めて、三章を読み進めて行く必要を覚える。しかも三章一節で先ず、十字架に付けられたイエス・キリスト (Ἰησοῦς Χριστός: ἐσταυρωμένος) に言及がなされている。換言すると、パウロは三章二節から一二節までではキリストに直接は言及しないで、鍵となる用語は「信仰 (πίστις)」であるが、実は隠れた形でパウロの議論の根底にはキリストがいると言うことができよう。また表現を変えてみると、パウロが「πίστις (信仰)」と言う際には私たちの言うような意味での抽象的な信仰、信じることを言うよりも、キリスト信仰あるいはキリスト御自身と言う、より具体的なものを意図していると言える。

より具体的にガラテヤ人への手紙三章の議論に即して見ていくと、先ずローマ人への手紙同様に、黙示的なモチーフが至る所に見い出される。聖書には、異邦人も神の民に含められることが予め約束されている (三章八〜九節)。そして、異邦人が福音を受け入れている今の出来事が約束の終末的成就であるとパウロは指摘している (三章一四節)。異邦人のキリスト教信仰とは黙示的なものであり、新しい時代の到来の証詞に他ならない (三章二三〜二九節)。ガラテヤの諸教会における御霊の臨在 (三章二〜五節) も新しい時代のしるしであり、終末の約束の成就であった (三章一四節後半、四章六節)。御霊はいのちの源である (五章二五節) が、そのいのちとは、キリストの死に参加すること (二章一九〜二〇節) を通して新しい時代の力に生きるいのち、神／キリストと共に生きる終末的いのちのことである。ハバクク書二章四節の「生きる」とは、そのような意味でのいのちのことであろう。律法には、終末的いのちを与える力はない (三章二二節、レビ記一八章五節、ガラテヤ三章一二節参照のこと)。信仰、御霊、いのちという黙示的祝福は定められた時になって始めて与えられる (三章二三節、四章四節)。しかも「唯一の子孫」 (三章一六節) である「約束された子孫」 (三章一九節) のみ与えられる。パウロは、この子孫はキリストであって (三章一六節)、他の者たちはただ「キリストにあって／よって」のみ豊かな終末的祝福を受けることができる (三章一四節) と

する。つまりキリストに参加することを通してのみ可能となる(三章二六―二九節)。パウロにとっては神の約束はキリストにおいてなされ、キリストにおいて成就するのであった。

三章六節でパウロは創世記一五章六節を引用し、その引用から七節で「*ἐμοῖς*」からの者たちは、即ち彼らこそがアブラハムの息子たちである、ということを知りなさい。」とパウロは勧めている。そして、「神が異邦人を *ἐμοῖς* から義とすることを予め知っていたので、聖書はアブラハムに『すべての異邦人たちはあなたにあって／よって祝福を受ける。』と予め福音宣教した」(八節)のである。「そういうわけで、*ἐμοῖς*」からの者たちは、真実な／信頼に足るアブラハムと共に祝福を受ける」(九節)とパウロは結論付けている。別の機会に論じたように、ここでパウロはアブラハムという人物に何らかの仲介的存在、キリストのような役割を演じさせている。キリストを信じる者たちは、アブラハムへの神の祝福の約束を自分たちのものとすることができる。つまり、アブラハムはキリスト者たちに神の祝福をもたらす仲介者であると言うことになる。ただし、アブラハムの「唯一の子孫」であるキリストを通してキリスト者たちはアブラハムに対する神の約束に与ることができる(三章二六―二九節)。八節の *ἐμοῖς* (あなたにあって／よって)と一四節の *ἐμοῖς* *ἐπολέηθη* (キリスト・イエスにあって／よって)とは無関係なものとは思われない。アブラハムにあって／よって異邦人が祝福されると神は当初約束した(八節)が、結局はキリストにあって／よってアブラハムへの祝福は異邦人に届くようになった(一四節)。それでは、アブラハムとキリストとの関係はどうなっているのか、と言うことになるが、そのあたりのことが一五、一六節で説明されている。即ち、パウロがアブラハムに言及して論じているが、実はアブラハムとはキリストを指し示す存在であったことがわかる。つまり、アブラハムの「唯一の子孫」であるキリストにあって／よって、異邦人たちはアブラハムに約束された祝福を与えられている。

さらに一章二三節と三章二三、二五節では、冠詞付きで *πιστις* が用いられているが、どちらも明らかに「信じること」そのものを指していない。一章二三節では「以前私たちを迫害していた者が、そのとき滅ぼさうとしていた信仰を今は宣べ伝えている。」とあり、三章二三、二五節では「信仰が来る前には、私たちがやがて啓示される信仰まで、閉じ込められて律法の下に監督されていた。……しかし、信仰が来た以上、私たちはもはや養育係の下にいません。」とある。このような用例では明らかに福音またはキリスト教のメッセージとはほぼ同義で *πιστις* が用いられている（換言すると、信じることを信仰の主観的側面、このメッセージを客観的側面と呼ぶことができる）。冠詞付きの *πιστις* の直前の三章二節には *πιστις ἰησοῦ Χριστοῦ* という表現が見られ、また三章二四節にも冠詞がない *πιστις* が見い出される。前後の *πιστις* を従来通り「信仰」つまり信じることと理解することには躊躇を覚える。三章一四節で *ἐν Χριστῷ ἰησοῦ καὶ διὰ τῆς πίστεως* とが並行に見い出されることも考慮すると、*πιστις* とキリストとの間には従来考えられてきた以上に密接な関係があると認めざるを得ないであろう。*πιστις* の用法、意味についての詳細は別の機会に譲らなければならぬが、ガラテヤ人への手紙三章での *πιστις* の用例では、キリストと密接な関係があることは認めなければならぬであろう。従って、一一節と一二節で一見見られる信仰と行ないとの対照は、むしろ律法とキリストとの対照と考えるべきであろう。とすると、一一節のハバクク書からの引用中の *δικαιοσύνη* をキリストを信じ、義とされた者にはなく、キリスト御自身と結び付けて解釈する可能性も十分に考慮できるかと思われる。「しかし、律法にあつて／よつて神の御前に義と認められる者はだれもないということとは明らかです。なぜなら、『正しい者であるキリストは（御自分の）信仰／真実から生きる。』からです。しかし、律法は（キリストの）信仰／真実からではない。『それら（戒め）を行なう者は、それら（戒め）にあつて／よつて生きる。』からです。」

おわりに

以上、通常の理解とは異なり、パウロはハバクク書二章四節を実はキリスト論的に解釈しているのではないかと論じてきた。ハバクク書二章四節はパウロにとって信仰義認を論証する古典的テキストである、と教わり、理解し、確信してきた方々を、このような拙稿で容易に説得できるとも思えない。しかし、「正しい者(あるいは義人)」はキリスト者のことと言うのが決して唯一の可能な解釈ではなく、異なる解釈をしたから、即信仰義認の教理そのものを否定することにはならないことは十分におわかり頂けたことと思う。神がキリストにおいて行ない、キリストが神に忠実に従った行為に、私たち人間が信仰をもって応答して始めて救いをもたらされる。その意味で決して信仰義認の教理を否定すると言うよりも信仰義認の教理とキリスト論との関係をより明確にするとしよう。あるいはキリスト論的解釈は間違いかもされないが、このような試行錯誤を通して、「信仰義認」の教理の再考を行なったり、パウロの議論を再解釈したりすることは無意味とは言えないであらう。

注

①パウロがハバクク書二章四節をキリスト論的に解釈していたとする学者には以下の人々がいる。

- R. B. Hays, *The Faith of Jesus Christ*, SBL Dissertation Series 56 (Chico, Ca.: Scholars Press, 1983), pp. 150-57; "The Righteous One" as Eschatological Deliverer: A Case Study in Paul's Apocalyptic Hermeneutics' in: J. Marcus and M. L. Soards (eds) *Apocalyptic and the New Testament*, FS for J. L. Martyn Journal for the Study of the New Testament Supplement Series 24 (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1989), pp. 191-215; S. K. Stowers, *A Rereading of*

Romans: Justice, Jews, and Gentiles, (New Haven/London: Yale University Press, 1994), pp. 198–202; D. A. Campbell,

Romans 1.17–A Crux Interpretum for the πλωρις Χριστοῦ debate' *Journal of Biblical Literature* 113 (1994), pp. 265–85; I. G. Wallis, *The Faith of Jesus Christ in Early Christian Traditions*, Society for New Testament Studies Monograph Series 84 (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), pp. 78–82.

② A. Strobel, *Untersuchungen zum eschatologischen Verzögerungsproblem auf Grund der spätjüdisch-wrchristlichen Geschichte von Habakuk 2,2ff*, Supplements to Novum Testamentum vol. 2, (Leiden: Brill, 1961) 55–56 参照のこゝろ。具体的な文脈としては死海写本中のハバクク書のベシヘル (1QpHab vii) をよめよ。

③パウロは俗に「七十人訳」と呼ばれるギリシヤ語訳本文を専ら使用してゐたと語られる。D. Moody Smith, 'Probably it is better to conclude that Paul's usage is septuagintal than to say he uses the LXX, since the latter comes to us only through christian hands in manuscripts no earlier than the fourth century' (in: D. A. Carson and H. G. M. Williamson [eds], *It is Written: Scripture Citing Scripture*, FS for B. Lindars [Cambridge: Cambridge University Press, 1988] p. 273). C. D. Stanley, *Paul and the language of Scripture: Citation technique in the Pauline Epistles and contemporary literature*, Society for New Testament Studies Monograph Series 74 (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), pp. 252–64 参照のこゝろ。

④ただし、ハブル語本文の母音記号は後代のものであるので、ハバクク書がギリシヤ語に翻訳された時代にその母音記号がなかったかどうかは確認のしようがない。

⑤D. A. Carson, *Exegetical Fallacies*, (Grand Rapids, Mich: Baker, 1984), pp. 82–84; S. E. Porter, *Idioms of the Greek New Testament*, second edition (Sheffield: Sheffield Academic Press, 1994), pp. 103–104 (邦訳バスターリー・D.・ポーター著「ギリシヤ語新約聖書の語法」「ナザレ企画」一九九八年「八五―八六頁」参照のこゝろ)。

⑥ギリシヤ語訳の「バクタ書」二章三―四節をメシヤ的に解釈する伝統については、A. Strobel, *Untersuchungen zum eschatologischen Verzögerungsproblem auf Grund der spätjüdisch-urchristlichen Geschichte von Habakuk 2,2ff.*, pp. 53-56; D.-A. Koch, 'Der Text von Hab. 2.4b in der Septuaginta und im Neuen Testament', *Zeitschrift für neutestamentliche Wissenschaft* 76 (1985), p. 73 n. 25 参照(㉑)。

⑦日本聖書学研究所編、村岡崇光訳『聖書外典偽典四 旧約偽典Ⅱ』(教文館：一九七五年)二〇三頁によつた。三節の「義人たちの秘密」については、「義なるおかたの秘密」と単数になっている写本もある(E. Isaac trans., '1 (Ethiopic Apocalypse of Enoch) in: J. H. Charlesworth (ed), *The Old Testament Pseudepigrapha*, vol I [London: Darton, Longman & Todd/Garden City, NY: Doubleday, 1983] p. 30 参照(㉑)」。同様の単複の相違は三九章六節にも見られる。

⑧J. H. Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha and the New Testament*, Society for New Testament Studies Monograph Series 54 (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), p. 38, pp. 102-103; E. Isaac, '1 (Ethiopic Apocalypse of Enoch)', in: *The Old Testament Pseudepigrapha* vol 1, p. 7 参照(㉑)」。いずれにしても「リマ」の見解は極端である。第一エノク書が五部以上の文書の複合体であることは間違いない。

⑨新改訳では二章二九節は「神は正しい方で……義を行なう者はみな神から生まれた」とを…。」と「神」(つまり御父であろう)と結び付けて訳されている。原文では、前者の「神」は全く明記されない三人称単数の主語であり、後者は男性単数の人称代名詞である。前節の二八節の男性単数の人称代名詞を「キリスト」と訳す(「キリストのうちにとどまっていなさい。……キリストが現われるとき、……」)以上は、二九節でも「神」への言及ではなく、「キリスト」への言及と理解するべきであろう。

⑩勿論、「こ」での「啓示」とは、「信仰義認」の教理が神の「こ」とばとして啓示されたと言う限定的な意味合い

に解釈することも可能である。一章一七節の「啓示」を聖書の啓示との関連で理解するには動詞の現在時制が一番問題となると思われる。あるいはターヤタンのように「福音宣教と結び付けられる、一連の進行中のプロセス (an ongoing process, or series of actions connected with the preaching of the gospel)」と理解するハッセルハイン (Moo, *The Epistle to the Romans*, The New International Commentary on the New Testament [Grand Rapids, Mich/Cambridge, U.K.: Eerdmans, 1996], p. 70 44-45) 田代 J. D. G. Dunn, *Romans 1-8* Word Biblical Commentary 38a [Dallas, Tx: Word, 1983], p. 48)° J. C. Becker, *Paul the Apostle — The Triumph of God in Life and Thought* —, [Edinburgh: T. & T. Clark/Fortress Press, 1980] 参照: ハッセルハインの福音の核心を「終末 (終末) 的神の勝利」であると論じている。

① 田代 J. D. G. Dunn は 'The quotation from Hab. 2:4 confirms... the truth that righteousness is to be attained only on the basis of faith' と論じている (*The Epistle to the Romans*, p. 76)°

② 田代 C. H. Dodd は 'It is much more likely that he drew upon a tradition which already recognized the passage from Habakkuk as a *testimonium* to the coming of Christ, and this tradition may well have been formed even before Paul wrote to the Galatians' (*According to the Scriptures* [London: James Nisbet, 1961], p. 51) と論じている°

③ 以下の提議を列挙している。① 参照: 田代 田代 J. D. G. Dunn, *Romans 1-8*, pp. 43-44) ② 「小さな量の信仰から、より大きな分量の真実から入る信仰へ」 (J. D. G. Dunn, *Romans 1-8*, pp. 43-44) ③ 「小さな量の信仰から、より大きな分量の信

A *Critical and Exegetical Commentary on the Epistle to the Romans*, vol. 1 [Edinburgh: T. & T. Clark, 1985], p. 100; H. Schlier, *Der Römerbrief*; Herders Theologischer Kommentar zum Neuen Testament VI [Freiburg: Herder, 1987], p. 45; J. A. Fitzmyer, *Romans*, The Anchor Bible 33 [New York: Doubleday, 1992], p. 263; B. Byrne, *Romans Sacra Pagina* [Collegeville, Minn.: The Liturgical Press, 1996], p. 60; D. J. Moo, *The Epistle to the Romans*, p. 76)° ④ 「神の

仰く」(W. Sanday and A. C. Headlam, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle to the Romans*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1980), p. 28) 同「キリストの真実から人の信仰く」(M. D. Hooker, *ΠΙΣΤΙΣ ΧΡΙΣΤΟΥ*, *New Testament Studies* 35 [1989], pp. 339-40)

⑭ 実はこの、ハバクク書二章四節の本文に拘わる重大で複雑な問題がある。ヘブル語本文では「正しい人は彼／自分の真実(／信仰)によって(πιστες)生きる。」となっているが、ギリシヤ語本文では「正しい人は私／わたしの信仰／真実によって(ἐκ πιστεως μου)生きる。」となっている。ところが、パウロはローマ人への手紙でもガラテヤ人への手紙でも、人称代名詞が全く附随していない「信仰／真実から(ἐκ πιστεως)」という形で引用している。そこで、筆者の解釈をパウロが本当に意図したのであれば、ヘブル語本文に従ってギリシヤ語本文を「彼の信仰／真実によって(ἐκ πιστεως αὐτοῦ)」と「訂正」したのではないか、という反論が考えられる。しかし、パウロは先ず自分の解釈とは相容れないギリシヤ語本文の「わたし／私の(mou)」は当然削除したが、ἐκ πιστεως εἰς πιστινとの並行を重視する視点から、意味上都合の良いヘブル語本文の「彼／自分の(αὐτοῦ)」も採用しなかったと説明することができる。ハバクク書二章四節後半の本文の詳細についてはD. A. Koch, 'Der Text von Hab. 2,4b in der Septuaginta und im Neuen Testament', *Zeitschrift für neutestamentliche Wissenschaft* 76 (1985), pp. 68-85 参照のこと。

⑮ δικαιοσυνη θεου はローマ人への手紙では、一章一七節、三章五、二二、二二、二五、二六節、一〇章三節で用いられている。頻度の割りには重要な表現で、意味については多くの議論があり、意味を容易に規定することはできない。「神の義」を理解することは、ローマ人への手紙のみならずパウロ神学全体の神髄を理解することと言っても過言ではない。拙論「義認、聖化そして契約―パウロの『義認』理解―」『福音主義神学』二二(一九九一年)三―二〇頁参照のこと。ムーは主要な「神の義」理解として(一)神の屬性、(二)

神が賦与する地位・身分、(三)神の活動を挙げて (*The Epistle to the Romans*, pp. 70-71) 数頁を費やして論じているが、基本的には関係概念として理解して「the act by which God brings people into right relationship with himself」と結論付けている (*The Epistle to the Romans*, p. 74)。⁹ 學者間の議論については M. T. Brauch, 'Perspectives on "God's righteousness" in recent German discussion' in: E. P. Sanders, *Paul and Palestinian Judaism*, (London: SCM Press, 1977), pp. 523-542; P. Stuhlmacher, *Gerechtigkeit Gottes bei Paulus*, *Forschungen zur Religion und Literatur des Alten und Neuen Testaments* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1966) など参照のこと。

⑩ $\pi\lambda\omicron\tau\iota\varsigma$ $\text{I}\nu\theta\omega\upsilon$ $\chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma$ をどうに理解するかは大きな問題であるが、概して英語圏の新約学者たちの間では、主格的属格に理解する(つまり「イエス・キリストの信仰／真実」)傾向が近年強いが、ドイツ語圏の新約学者の間では目的格的属格理解(つまり「イエス・キリストを信じる信仰」)が強いように見受けられる。このローマ人への手紙第三章一二節は、主格的属格論者たちにとっては「古典的」に主格的属格を支持する箇所である。筆者は、決してすべての $\pi\lambda\omicron\tau\iota\varsigma$ $\text{I}\nu\theta\omega\upsilon$ $\chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma$ を主格的属格に解釈するべきであると主張するつもりはないが、この箇所ではかなり有力な理解と思われる。「神の義がイエス・キリストを信じる信仰を通してすべて信じる者たちに」と言う理解よりも、「神の義はイエス・キリストの信仰／真実を通してすべて信じる者たちに」と言う方がすっきりし、理解し易い。目的格的属格に固執する学者としては原口尚彰「パウロにおける $\pi\lambda\omicron\tau\iota\varsigma$ $\text{I}\nu\theta\omega\upsilon$ $\chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\varsigma$ → 主格的属格説に答えて」「パウロの宣教」(教文館、一九九八年)二一七―二四三頁、J. D. G. Dunn, 'Once More, III $\Sigma\text{TII}\Sigma$ $\text{XPI}\Sigma\text{TORY}$ ', in: E. E. Johnson and D. M. Hay (eds), *Pauline Theology* vol. iv: Looking Back, Pressing On, (Atlanta, Ga: Scholars Press, 1997), pp. 61-81 などや挙げるのがである。主格的属格の議論は、例えば R. B. Hays, *The Faith of Jesus Christ*, $\text{III}\Sigma\text{TII}\Sigma$ and *Pauline Christology: What Is At Stake?*, in: E. E. Johnson and D. M. Hay (eds), *Pauline Theology* vol. iv, pp. 35-60; R.

N. Longenecker, *Galatians*, Word Biblical Commentary 41 (Dallas, Tx: Word, 1990), 87-88; B. Witherington III, *Grace in Galatia: A Commentary on Paul's Letter to the Galatians*, (Grand Rapids, Mich: Eerdmans, 1998), pp. 178-82; 太田修司「πλοττις ἡγοοὸς Χριστοῦ」—言語使用の觀察に基づく論考『聖書学論集』第二十六号（一九九三年）一三三—一六三頁をよむがよい。

⑮例をたゞ E. P. Sanders, *Paul, the Law and the Jewish People*, (London: SCM Press, 1985/ Fortress, 1983), pp. 21-22

⑯拙論「パウロの創世記一五章六節解釈—ガラテヤ人への手紙三章の文脈をめぐって」『基督神学』no. 10（一九九八年）一—一八頁

⑰条件節に動詞がなく、帰結節にεἰが欠落しているが、第二級条件文、通称反実仮定に分類して良いと思われ。Porter, *Idioms*, pp. 259-61（邦訳『語法』二四九—五一頁）；B. Witherington III, *Grace in Galatia*, pp. 192-93 参照をよむ。

⑱例をたゞ B. Witherington III, *Grace in Galatia*, pp. 212-13; S. K. Williams, 'The Hearing of Faith: ΑΚΟΗ ΠΙΣΤΕΩΣ in Galatians 3', *New Testament Studies* 35 (1989), pp. 82-93 参照をよむ。パウロ書簡内と類似の表現はローマ人への手紙一〇章一七節（ἡ πλοττις ἐξ ἀκοῆς）に見られる。

（新約神学・教師）